

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A Study of Chongniu Fanqie in Xinji Zangjing Yinyi Suihanlu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 季, 鈞菲, Ji, Jun-Fei メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2398

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



『新集藏經音義随函録』における重紐反切について

季鈞菲

0 はじめに

「逢難字而随讀随抄、遇殊文而旋音旋切、積成一千餘紙、聚得十萬餘言¹。」
(難字に逢えば、すぐ抄録し、特殊な文字に遇えば、すぐ音切を施す。(結局)、千枚余りの紙を累積し、十万余りの文字を聚めることになった。) この言は、『新集藏經音義随函録』(940)の巻末にある『慶冊疏文』の一部である。

五代後晋の僧である可洪は藏經には難字が多いことを痛感し、前後十年間ほどで膨大な音義書である『新集藏經音義随函録』(『可洪音義』と略称する場合が多い。本稿もこれに従う。)を編纂した。成立年代の比較的に近い仏典音義である玄應の『一切經音義』(661)、慧琳の『一切經音義』(784-807)に比べ、『可洪音義』は長く中国本土においては失われ、再発見されてからの時間もまだ長くはないため、研究はあまり行われていない。本稿は重紐研究の立場に立脚し、統計法、反切比較法、反切構造分析法²を以って『可洪音義』における重紐反切を考察する。

1 可洪と『可洪音義』

1.1 可洪の紹介と編纂の理由

可洪は五代後晋の僧で、漢中地域で生まれた³。彼の一生に関する記録は、歴代の文献資料にはほとんど残されていない。遺憾ながら、手がかりとなるような文献を見出せなかったため、ここでは鄭賢章 2007 の以下の記載を再度引用する他ない。なお、原典に当たって引用に誤りがないか、確認してある。

中国語原文：

可洪(五代)、比丘、秦人、住長安石羊寺。初習儒業、能文。既皈仏、博通經籍、時講説、座下恒盈百衆。有新集藏經音義随函録三十巻⁴。

¹ 為五、八十四頁、裏面。

² 中国語では「反切结构分析法」と呼ぶ。日本語訳は筆者による。

³ 『可洪音義』では、各冊の最初に「漢中比丘 可洪撰」とある。

⁴ 比丘明復《中國佛學人名辭典》, 中華書局, 1988, p. 64。

日本語訳：

可洪（五代）、比丘、秦の地域の出身であり、長安の石羊寺に住んだ。最初は儒学を学び、文章を書くのに巧みであった。後に仏学を研鑽することになり、經典及びその他の書籍に広く通じるようになった。（經典などを）講説する際には、講壇の下に聴きに來る人々は常に百人を超えた。著書に『新集藏經音義隨函錄』三十卷がある。

この記述の基となった文献が何であるか、確認できていないが、一先ずはこれにより、可洪という人物の生涯は多少了解できる。

『可洪音義』の序文では、同書編纂の理由を二つ挙げている。一、藏經には誤った文字が多いことを痛感した。二、諸家の音義には賛成できなかった。

1.2 『可洪音義』の紹介と研究状況

1.2.1 『可洪音義』の内容、成立過程と版本

『可洪音義』は全三十卷である。卷頭には『藏經音義隨函錄前序』（可洪作）と『序内文字音切』（可洪作）があり、卷末には『大藏經音義隨函錄後序』（可洪作）、『贊經音序』（希悟作）、『施冊入藏疏文』（可洪作）、『慶冊疏文』（可洪作）がある。

高田 1994 によれば、「『可洪音義』は後唐の長興二年（931）十月七日から、河中府方山の延祚寺藏經を底本として、看經と稿本の作成にはいり、同清泰二年（935）十二月三日に一応の作業を終えた。草稿の完成後、翌清泰三年から浄書にかかり後晋の天福五年（940）六月二十日に完成し、序文（前序）を加えた。ついで音義の完成を記念して齋会を設けるとともに、九月十五日をもって朝廷に献呈した。」という。これにより、編纂の大体の過程が知られる。

また、許端容 1991 は、『可洪音義』は長く高麗藏本が唯一のテキストであったが、敦煌遺書中には『可洪音義』写本の断片が数点存在することを初めて明らかにした。また、敦煌写本と高麗藏本とは、多少の異同が存在するものの、両者は基本的に一致し、さらに高麗本の誤っている箇所を敦煌写本がやはり同様に誤ったような場合もあることを論じている。

1.2.2 『可洪音義』の研究状況

仏典の音義を編纂する目的は、仏典の中で使われる漢字の発音と意味を説明することである。そのため我々は、音義から仏典の成立した時代の豊富な音韻事実を探り出すことが可能である。とりわけ、編纂者が使った反切の異同は、我々に中古音から近代音までの音韻変化の証拠を与えてくれる。『可洪音義』は典型的な仏典音義書であり、豊富な音韻材料を提供してくれるため、その研究

価値はかなり高いことが予想される。近年、徐々にこれに関する論文、著作が発表されるようになっていく。以下、まず先行研究を簡単に紹介する。

①許端容 1989 可洪新集藏經音義隨函錄音系研究

系聯法を用いて『可洪音義』の反切を調査し、『可洪音義』の音系を研究した。帰納された声類は三十五種、韻類は百八十七種である。

②高田 1994「可洪隨函錄と行瑠隨函音疏」

豊富な文献を使い、『可洪音義』の版本、底本と敦煌写本を紹介し、その中の反切を行瑠『隨函音疏』と比較対照して考察した。

③儲泰松 2002 可洪音義研究⁵

儲泰松 2004 《可洪音義》札記

前者で、『可洪音義』にある音注、音義反切を手かがりとし、韻類の変化、特別な音変化などの究明に力を注いだ。ここでは反切材料の分析と細部の処理がさらに緻密に行われている。その後、補論である後者で『可洪音義』の中の小韻、篇韻、清濁、輕重などを詳しく解釈した。

④黄仁瑄、聂宛忻 2007 唐五代佛典音義音系中的舌音声母

黄仁瑄 2010a 唐五代佛典音義音系中的唇音声母

黄仁瑄 2010b 唐五代佛典音義音系中的全浊声母

黄仁瑄 2011a 唐五代佛典音義音系中的牙音声母

黄仁瑄 2011b 唐五代佛典音義研究

黄氏は上の一連の論文で、唐五代の佛典音義の中の声母を全面的に考察した。黄氏は『可洪音義』に見られる梵漢対音⁶の材料を分析し、許端容 1989 の研究を補足している。その結論は、可洪音系の濁音声母は無声無氣となっており且つ同じ調音点の鼻音が先行するということであった。

1.3 小結

従来の研究は既に『可洪音義』の版本・音韻体系をめぐり、様々な面で豊かな成果を挙げているが、細部にはまだ検討する余地があると言える。特に中国語音韻史上の難問の一つ、「重紐」についてはほとんど言及されていない。本稿では重紐を中心に考察を展開する。それにより、一方では従来の『可洪音義』

⁵ 当該論文は儲泰松氏のポストドクターの報告論文である。本文を目撃することができなかったため、やむを得ず鄭賢章 2007 に紹介される論文の概要で代用した。

⁶ 黄仁瑄、聂宛忻 2007 によれば、『可洪音義』には、梵漢対音は約 15000 例あるという。

の研究を補足でき、他方では『可洪音義』から唐五代（宋の初頭）における重紐の状況を明らかにできるであろうと考える。

2 考察範囲と作業方法

本節では、本稿の考察範囲及び資料を取り扱う際の作業方法を紹介する。

2.1 考察の範囲

周法高 1989 は、「いわゆる重紐というのは、『切韻』系韻書の中で、同じく三等に属する（同一韻中の）唇牙喉音声母小韻に（声母を同じくする）二種の反切があり、それを『韻鏡』、『七音略』などの早期韻図では、（一枚の転図において）その一方を三等の欄に置き、一方を四等の欄に置く現象である。」と重紐を定義した⁷。しかし、重紐現象はただ『切韻』系韻書の中だけに見られるのではなく、『玉篇』、『慧琳音義』、『蒙古字韻』など様々な『切韻』と異なる音韻体系を反映する資料の中にも現れている。また、重紐韻の範囲も研究者によって意見が相違する。伝統的な研究では、重紐の対立は支、脂、祭、真（諄）、仙、宵、侵、塩という八つの韻の唇牙喉音声母の下で発生すると考えられているが、これ以外の韻にも枠を広げるべきだと主張する説もある。本稿では一番広く認められている説に従い、「清一庚三⁸、幽、蒸⁹」の四韻も考察の範囲に含める。他方、云母（匣三）と以母の対立は重紐の対立ではなく、韻図では見かけ上重紐の対立と同じようになっているに過ぎないものとして、本稿では重紐韻声母から除外する。

つまり、本稿では『切韻』（一部『集韻』）の支、脂、祭、真（諄）、仙、宵、侵、塩、清一庚三、幽、蒸という十二韻の対立があるとされる唇牙喉音声母（云母、以母を除外）小韻所属字を考察の対象範囲とする。

2.2 作業方法

資料の信頼性を確認するのは音韻研究の前提である。本稿で使用する基本テキストは明治 18 年（1885 年）に弘教書院によって出版された『大藏經』である（いわゆる『縮刷藏經』）。『可洪音義』は音義部の中の為一から為五までであ

⁷ （ ）内の字句は、筆者が加えたもの。従来の研究では、三等の欄に置かれるのを重紐 B 類（または乙類）と呼び、四等の欄に置かれるのを重紐 A 類（または甲類）と呼ぶ。

⁸ 太田 2013 は佐々木 1983 (pp. 392-438) の説を踏まえ、『切韻』の基づいた先行韻書の中には庚と清を分けないものがあると説明し、庚三と清は相補分布で典型的な重紐韻の分布パターンだと主張している。(p. 81) 本稿では、太田説を採用して庚三と清韻の考察を行う。

⁹ 平山 1972 は、蒸韻は唇音は B、牙喉音合口は B で、牙喉音開口は B と C の両方があるという変則的状況を指摘している。

る。完全な伝本は高麗藏所収本のみだが、この弘教書院版大藏經所収本はその活字版で、字体の判読が容易であることが利点である。但し逐次東京稀覯典籍蒐集会 1936 影印の東京増上寺藏高麗刊本も参照した。

『可洪音義』を通覧すると、二点の特徴が見られる。

①他の音義書、韻書、字書を参照したところが多い。

例えば、「鄮鄮、時戰反、西域國名也。切韻作鄮善、常演也¹⁰。」「騾馬婁、上洛禾反、下音樓、玉篇云馬類也¹¹。」しかし、可洪は全て無批判に利用するわけではなく、きちんと吟味してから取捨を判断していると考えられる。このことは、例えば、「鐵推、直垂反、正作鎚鍾推三音、江西音作鍾丈位反、非也¹²。」「悲懺、倉歷反、痛也、正作憾。又郭氏作私占反、非也¹³。」のような記載から窺える。

従って、『可洪音義』に現れる反切に対して他の音義書類の反切と同一の音韻体系を反映するものとして考察することには支障がないと言えよう。

②異体字、別字、俗字が多い。

前序によれば、編纂者の可洪は従来の經典音義書にある異体字、別字、俗字をできる限り一つに定めることに努力したことがわかるが、やはり徹底してはいない。例えば、「憔悴」と「顛顛」、「淫佚」と「姪姪」、「瘡痂」と「暗啞」の併用がまさにそれである。反切の有効性を保つためには、これらの異体字を一つの通用字に直さなければならない。

従って、作業の方法として、筆者はまず重紐韻の所属字を網羅的に集め、その後、許端容 1989, 鄭賢章 2007, 教育部異體字字典（台灣學術網路十一版（正式五版））を参考にして、別字、俗字を統一した。

以上の二点に基づき、筆者は総計 27597 条の重紐反切を得た。重切、誤切を除くと、最終的に総計 710 条となった。以下の表 1 を参照されたい。

表 1 重紐反切統計表

声類 重紐	唇音	牙音	喉音	総計
A 類	211	112	39	362
B 類	109	185	54	348
総計	320	297	93	710

¹⁰ 為四、六十九頁、裏面。

¹¹ 為四、三十九頁、裏面。

¹² 為四、三十五頁、裏面。

¹³ 為四、三十九頁、表面。

3 重紐韻の実態

本節では『可洪音義』における重紐反切の実態を紹介する。分析に当たっては「類相関」の考えを用いる。平山 1966 によれば、「類相関」というのは重紐韻を A, B, 非重紐韻を C とすると重紐韻は反切上字が A であれば、下字が何であろうと帰字は A, 反切上字が B であれば、下字が何であろうと帰字は B, 上字が C の場合は下字が A の場合は帰字は A, 同様に下字が B の場合には帰字は B となるというふうに帰字、上下字の間に類の相関関係が見られることをいう。パターン化して示すと、A+A, A+B, A+C はいずれも帰字 A; B+A, B+B, B+C はいずれも帰字 B; C+A は帰字 A; C+B は帰字 B という関係である。この関係を利用することで、帰属未詳の帰字について、上下字が A なのか B なのかを判断することができ、また唇牙喉音声母以外の重紐の対立の無い声母が音声的に A に近いのか、B に近いのかを判定することもできる。

3.1 反切下字

3.1.1 A 類、B 類下字

まず、上字の如何を問わず、A 類、B 類反切における下字の状況を見てみよう。結果は以下の表 2 の通りである。

表 2 反切下字分布表

下字 帰字	A 類	B 類	C 類	知組	精組	章組	莊組	日母	来母	云母	以母	四等
A 類	90	10	13	9	44	69	0	25	34	0	52	16
B 類	6	238	14	3	6	14	1	0	41	17	8	0

この表では B+A→B, A+B→A の例を除去していないが、それらを不純物として含んでいるにしても、A 類、B 類下字に絞って言えば、帰字と下字の重紐類別の一致する反切が絶対多数である。今、その不純物を含むと考えられる帰字 A—下字 B, 帰字 B—下字 A はそれぞれ 10 例と 6 例であり、帰字 A—下字 A, 帰字 B—下字 B に比べると、量的にはごく僅かである。以下にそれらの例外反切をまとめて掲げる。(表のうち、1-10 は帰字 A—下字 B の例であり、11-16 は帰字 B—下字 A の例である。)

歸字	聲母	韻母	重紐	上字	重紐	下字	重紐
1 臂	幫	寘	A	卑	A	義	B
2 譬	滂	寘	A	匹	A	義	B
3 辟	並	寘	A	普		義	B
4 辟	並	寘	A	毗	A	義	B
5 表	幫	小	A	彼	B	矯	B
6 徧	幫	獮	A	匹	A	錦	B
7 蔽	幫	祭	A	毗	A	被	B
8 幼	影	幼	A	伊	A	謬	B
9 藝	疑	祭	A	其	C	綺	B
10 躋	溪	宵	A	去	C	僑	B
11 佶	羣	質	B	耆	B	一	A
12 彪	幫	幽	B	彼	B	幽	A
13 羆	幫	幽	B	補		幽	A
14 繆	明	幼	B	眉	B	幼	A
15 謬	明	幼	B	美	B	幼	A
16 嶠	羣	笑	B	巨	C	要	A

歸字—上字が一致している 1, 2, 4, 6, 7, 8, 11, 12, 14, 15 は類相関の観点から不純物として除去すべき $B+A \rightarrow B$, $A+B \rightarrow A$ のパターンである。これらは重紐兩類の区別を反切上字が担っていると理解して支障はないであろう。しかし、 $B+B \rightarrow A$ (5), $C+B \rightarrow A$ (9, 10), $C+A \rightarrow B$ (16) のパターンとなった反切はどうしても類相関では説明がつかない ($A+A \rightarrow B$, $A+B \rightarrow B$, $B+A \rightarrow A$ は皆無)。説明が可能なのは、下字の「義」と「被」である。平山 1977 (pp. 9-10) によれば、中古音では唇音去声の場合には A 類韻母、B 類韻母の音声的差異があまり明瞭でなかったと推定している。「被」は支韻去声並母字であるため、平山説を適用できる。さらに、平山氏の考察によれば、支韻去声に属する「義」は A, B 兩類の反切に共通して下字となることがよく見られる。この意味では、『可洪音義』で見られる下字「義」の例外的用法は実は例外ではあるまい。

また、『慧琳音義』¹⁴を見ると、中古音の体系(『切韻』系統)で A 類である歸字「表」(5)と「躋」(10)は、「表、筆夭; 碑矯」、「躋、起驕」となっており、

¹⁴ 上田正 1987 『慧琳反切總覽』を参考にしている。「表」と「躋」との反切は共に同書の p. 88 から引用したものである。

上田正 1987 ではどちらも B 類とされている。『可洪音義』では、この「表」(5) と「蹻」(10) の反切はそれぞれ一種類しかなく、恐らく可洪の音韻体系ではこの二字は A 類ではなく B 類となっていたのであろう。

上で述べた点に基づいて言えば、円滑に解釈できない例外反切は僅か 9, 13, 16 という 3 例しかなくなる。9 の「藝」について、A 類説が一般的であるが、太田 2014 (pp. 42-43) は、もともと「鼻削ぎの刑」という忌避の意識が働く意味を持つ B 類の「劓」と同音であった「藝」はタブー語との同音関係を解消するため、体系的な空き間であった A 類に読み替えられた、とする。これによれば、「藝」はもともと B 類ということになり、古音遺留の可能性もある¹⁵。しかし本稿は暫く通説に従い、A 類とする。これで計算すれば、帰字一下字の対応関係では、A 類、B 類下字の一致率は $(90+6+10+238-3) \div (90+6+10+238) \approx 99.13\%$ となる。しかし、注意すべきなのは、この数字はあくまでも推定上の最大値に過ぎないということである。

3.1.2 「C+C」と「C+四等」の分布状況

唐代に入ると次第に中古音の音韻体系が変化し始める。C 類韻母と B 類韻母、中古四等と A 類韻母との合流はその例である。重紐反切でそれを検証するには、上字が C 類の反切で下字と帰字の相関状況を見なければならない。そこで本節では「C+C」と「C+四等」のパターンを対象に『可洪音義』におけるその二種類の合流がどうなっているか調べることにする。

筆者の調査では、「C+C」のパターンは総計 11 例見られた。そのうち、C+C → A, C+C → B はそれぞれ僅か 4 例と 7 例にとどまり、この数値から後者が前者に比べ量的に優位にあるとは言い難い。『可洪音義』において A 類反切は 362 例、B 類反切は 348 例で、A 類反切の総数が B 類のそれより少ないとは言えない。むしろ A 類の方が若干多いくらいであるから、4 と 7 という数値の差から見ると、C 類は A 類より B 類のほうに近いと考えて良いだろう。恐らく、『可洪音義』において、一部の C 類と B 類が合流し始めていると思われる。

また、「C+四等」のパターンは総計 5 例あり、帰字は一律 A 類である。例が少なく、実証能力も非常に強いとは言えないが、結果を見ると、一先ずは中古四等と A 類韻母の合流はかなり進んでいると言えそうである。

¹⁵ 太田 2014 は、董同龢 1944/1948 及び張日昇等 1973 における上古音との対応に基づき、「執」「藝」「櫛」は祭部 → 祭 B の変化を遂げているから、「藝」もまた B と判断できると指摘している。

3.1.3 舌齒音下字

舌齒音字が A 類音節、B 類音節のいずれに共通する音声特徴を持つかという問題は常に重紐研究の中の難問の一つである。とりわけ、来母と知組の帰属については「中間説」¹⁶と「B 類説」とに分かれて定説を見ない。辻本 1954 は来母・知組を B 類と認める説を提起しているが、平山 1991 は辻本 1954 を支持する森 1983 を批判し、「中間説」を改めて主張している。中国では、麦耘 1998、潘悟云 2001 も「中間説」を主張している。本節では資料研究の面から『可洪音義』における舌齒音字の帰属を考察する。考察する際に、平山 1991 で用いられる方法に従い、第一式反切と第二式反切¹⁷、即ち $C+X \rightarrow A$, $C+X \rightarrow B$ と $A+X \rightarrow A$, $B+X \rightarrow B$ のパターンを取る反切を共に材料とする¹⁸。その理由について、平山 1991 は「第二式反切にあつては被切字の類別が上字によって一応示されているとはいえ、下字もまた被切字に合わせて選ばれるのが原則だからである。」とする。換言すれば、反切の口唱性を追い求めるからであろう。

考察の結果は表 3 と表 4 の通りである。

表 3 第一式反切舌齒音字分布表

下字 帰字	知組	精組	章組	莊組	日母	来母	云母	以母
A 類	8	14	20	0	3	6	0	23
B 類	3	6	10	0	0	37	10	7

表 4 第二式反切舌齒音字分布表

下字 帰字	知組	精組	章組	莊組	日母	来母	云母	以母
A 類	1	24	31	0	17	23	0	21
B 類	0	0	4	1	0	7	7	1

類相関の観点で考えれば、重紐の対立のない声母が音声的に A 類、B 類のいずれに属するかということについては、 $C+X \rightarrow A$, $C+X \rightarrow B$ のパターンを取った第一式反切でしか検証することができない。第二式反切は上字が優先されて

¹⁶ 「中立説」、「中性説」とも言う。

¹⁷ 平山 1977 (pp. 3-4) では、論述の便宜上、A 類反切、B 類反切において C 類上字を用いたものを第一式反切と呼び、帰字の類に合わせて A 類上字（「匹」を除く）、B 類上字を各々用いたものを第二式反切と呼んでいる。

¹⁸ X は帰属未定の意味である。

歸字の歸属が決定されるので、そのデータはせいぜい傾向を判断するための参照材料に過ぎない。表 3 で示すように、第一式反切において精組、章組、日母、以母字は A 類に近い性質を示し、来母字、云母字は B 類に近い性質を示す。莊組は該当例がなく、重紐に関する傾向の判断ができないため、検討の対象から外す。問題は知組である。従来の「中間説」および「B 類説」とは異なり、『可洪音義』では知組字は A 類に近い性質を示す。先行研究を調べると、知組字は資料によって常に A 類と B 類の間を揺れている。筆者がかつて考察した隋の『博雅音』では知組字は 8 例しかないが、すべて B 類反切の下字に充てられている。恐らく、このような文献間の揺れがあるからこそ、知組字は「中間的」とされたのであろう。いずれにせよ、データから言えば、『可洪音義』において知組字は A 類と判断すべきである。

参考までに、表 4 のデータも見てみよう。知組、精組、章組、日母、以母字のグループと云母字は第一式反切で検証した結果と一致し、それぞれ A 類、B 類的な性質を示している。しかし、来母字の歸類統計数値は奇妙であり、第一式反切と第二式反切で完全に異なる状況をなしている。統計数値からは、前者では B 類に近く、後者では A 類に近い性質を示すと言える。しかしながら、このような状況から直ちに『可洪音義』における来母字は結局のところ「中間的」だとする訳にはいかない。とりあえず、第一式反切の統計数値に基づき、『可洪音義』における来母字を「B 類的」とするしかないであろう。

潘悟云 2001 (p. 109) は「重紐三等—云母—知組来組—章組—精組以母—重紐四等」のように重紐三等と重紐四等をそれぞれ両極にして、それぞれの舌歯音字と重紐兩類の遠近関係をまとめている。それを少し調整して、『可洪音義』における舌歯音字と重紐兩類の遠近関係を示すと以下ようになる。

「重紐三等—云母—来組—知組—章組—精組—以母—日母—重紐四等」

3.2 反切上字

次に、反切上字の状況を見てみよう。まず、下字の如何を問わず、A 類、B 類反切における上字の分布状況を掲げる。結果は表 5 の通りである。

表 5 反切上字分布表

上字 ㄅ	A 類	B 類	C 類	一等	二等	四等
	A 類	172	2	112	67	0
B 類	2	101	227	16	1	0

A 類、B 類上字に絞って言えば、基本的にそれぞれ A 類、B 類帰字に対応するが、各々2 例の例外が存在する。以下にこれらの例外反切を掲げてみる。(表のうち、1-2 は帰字 A—上字 B の例であり、3-4 は帰字 B—上字 A の例である。)

歸字	聲母	韻母	重紐	上字	重紐	下字	重紐
1 表	幫	小	A	彼	B	矯	B
2 牝	並	軫	A	秘	B	忍	
3 稟	幫	寢	B	匹	A	錦	B
4 鼻	滂	至	B	匹	A	脩	B

3.1.1 で述べたように、「表」は可洪の音韻体系においておそらく B 類として現れるため、例外反切から取り除くことができる。残りの3 例はそれぞれ「秘」と「匹」を上字として使っており、問題を解く鍵はこの二字にある。平山 1977 (pp. 1-2, pp. 16-18) では、「匹」の用法は C 類上字と同じ、すなわち「匹+A→A, 匹+B→B, 匹+C→C」だと指摘している。その後、遠藤 1990 ; 2001 は平山説を踏まえ、A 類反切上字「匹」のような、類相関で C 類上字と同じ働きを持ついわゆる「稀少反切上字」の分布とその存在する理由を述べ、また同論文の p. 8 では「秘」と同じ諧声符を持つ「必」を列挙している。李秀芹 2006 (pp. 147-149) では「必」が「匹」と同じ働きを持つと論じている。そのため、反切上字の「秘」は「匹」と同じ働きを持つ可能性が高いと予想される。従って、「稀少反切上字」の観点から考えると、残りの2, 3, 4 も例外反切とはならない。結局、帰字—上字の対応関係において、例外はゼロとなり、A 類、B 類上字の一致率は 100%である。

次に中古一等、二等、四等上字について述べる。中古一等上字の問題は次節で論じることにした。また、中古二等上字は僅か1 例しかないため、信頼性の高い結論は出しにくい。中古四等上字は9 例あるが、すべて A 類反切の上字に充てられている。そのうち、「四等+A」2 例、「四等+C」2 例、「四等+以母」1 例、「四等+章組」3 例、「四等+精組」1 例がある。以母、章組、精組字は既に「A 類的」であることが明らかになっているが、これらを A 類と同一視するなら、四等字+A の組み合わせの重紐反切は下字によって帰字の帰属が決定される、つまり C+A→A のパターンと同じと見なされる可能性がある。そのため、四等韻と A 類の合流を検証するには「四等+C」のパターンが対象となる。例が僅か2 例しかないが、すべて A 類帰字を導いているため、一応「A 類的」と判断しても無理はないであろう。結局、3.1.2 で議論した「C+四等」のパターンと同じ結果になる。やはり、『可洪音義』において中古四等と重紐四等 (A 類) との合

流はかなり進んでいると言えるであろう。この点、先に指摘した『可洪音義』ではC類韻母とB類韻母との合流はまだ進んでいないという点とは軌を一にしておらず、唐代音韻史における韻の合流状況（C類とB類、A類と四等韻の合流）と完全には一致していないように見える。

3.3 中古一等上字

本節ではこれまで棚上げにしてきた中古一等上字の問題を取り上げる。その分布状況は表6の通りである。

表6 中古一等上字分布表

下字 歸字	A類	B類	C類	知組	精組	章組	莊組	日母	来母	云母	以母	四等
A類	23	1	1	0	5	15	0	4	5	0	7	6
B類	1	14	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

量的にはA類に近いように見えるが、下字ごとに観察すれば、実は中古一等上字を取った重紐反切は下字（C類字、来母字除外）の重紐帰属、傾向に従って歸字の重紐帰属が決定されることがわかる。李秀芹 2006（pp. 149-151）によれば、中古前期の資料では中古一等上字を取った重紐反切は量的に少なく、傾向も明白でない。氏が調査した『經典釈文』、『切韻』、『慧琳一切経音義』、『説文解字繫伝』、『広韻』、『集韻』という六種の資料では、『集韻』だけ中古一等上字を10%以上使っている一方、他の資料ではすべて合わせても4%にも満たない。『可洪音義』では83÷710≈11.69%を使っているため、多用する部類に入ると言える。この83例の一等上字には模韻/o/12例、姥韻/o/28例、暮韻/o/21例、號韻/ao/2例、唐韻/uaŋ/5例¹⁹、鐸韻/uak/14例²⁰、談韻/am/1例が見られ、いずれも唇音的性質を持つ韻類である²¹。現時点でこの点について詳細な議論を行うのは困難であるため、重紐韻の変化の一側面を示すという指摘にとどめ、さらなる検討は今後に譲りたい。

¹⁹ すべて唇音字である。

²⁰ すべて唇音字である。

²¹ //内の推定音価は平山 1967（pp. 146-148）による。『可洪音義』に反映した音韻体系は唐代以降における韻の合流が見られるはずであるが、とりあえず参考として中古音の推定音価を挙げておく。

3.4 小結

以上、『可洪音義』における重紐反切の下字と上字について考察を行った。結論として次の四点が挙げられる。第一に、A 類、B 類下字と上字は共に帰字の帰属を決定することができる(一致率はそれぞれ 99.13%, 100%)。潘悟云 2001 (p. 108) では、「如果某種音類特征的反切行為有時候反映在反切下字、有時候反映在反切上字、這種音類特征一定是介音方面的特征。」(もしも、ある種の音類的特徴が時には反切下字で反映され、時には反切上字に反映されるということであるならば、この種の音類的特徴は必ずや拗介音の方面的特徴であろう。)という推論をしている。『可洪音義』における重紐兩類の対立もまさに拗介音の対立なのであろう。第二に、舌歯音のほうは A 類的、B 類的とはっきりと分かれている。即ち、精組、章組、日母、以母字は A 類的であるが、来母字、云母字は B 類的である。知組のほうは、従来の説と違い、『可洪音義』では A 類的な振る舞いを示す。第三に、C 類と中古一等上字は相配する下字の帰属、傾向によって帰字の重紐帰属を決定する。第四に、C 類字と B 類字との合流は中古四等と A 類字との合流ほど顕著ではない。このような不均衡は本当に『可洪音義』ないし可洪が操る音韻体系の特徴なのか、あるいは B 類反切が C 類字と B 類字の合流を起こしていない文献から反切用字を利用したことによって、C 類字と B 類字との合流が遅れているように見えるだけなのか、その究明は今後の研究の課題である。

4 通時的意義

黄笑山 1996 は、『切韻』時代の重紐は拗介音に区別があったとし、中唐五代になって重紐の区別は「声母の違いとなった」と論じている。しかし、第 3 節での考察を通して、後晋に成立した『可洪音義』における重紐の区別は依然として拗介音の区別とすべきであることがわかる。それに対して、李秀芹 2006 は、後唐に成立した『朱翱反切』における重紐反切は完全に上字によって帰字の帰属が決定されるとする。つまり、『朱翱反切』における重紐の区別は声母にあることになっている。

成立年代から見ると、『朱翱反切』は後唐(約 937-975)であり、『可洪音義』は後晋 940 年であり、非常に近い。では、なぜ両者の間にこのような明瞭な違いが見られるのであろうか。もちろん、『朱翱反切』は南朝の地域で作られたものであり、『可洪音義』は漢中、要するに北方地域で作られたものであるから、所拠方言の違いが生じたという可能性も否定できない。また、他の可能性も考えられる。『朱翱反切』は字書に施す音注、『可洪音義』は仏典に施す音注であるため、両書の作者は異なる立場に立ち、伝承した音注の系統、習慣なども異

なる。このような原因で生ずる各々の特徴は通常、一種の「音注資料の守旧性」と考えられ、当該文献の編者の音韻体系の現れとは言い難い。編纂者の実際に操る言葉にはそのような特徴はなかったという可能性も少なくないのである。しかし、既に述べたように可洪は音注を施す時に、無批判に従来の反切と直音を踏襲している訳ではなく、きちんと吟味してから取捨を判断しているため、個々の音注には彼自身の音韻意識が十分に反映されていると言ってよいだろう。こういった観点に立って全体を見れば、『可洪音義』に反映される五代の漢中地域の音韻体系における重紐両類の違いは拗介音の違いにあると大まかに判断できる。

5 おわりに

「凡具音切者總一十二萬二百二十二字、首尾十載、綴撰方周、用紙九百張、寫成十五筭。目曰藏經音義隨函錄焉²²。」（音切を施したのは総じて十二万二百二十二字であり、首尾十年間を使って、ようやく編纂を終えた。九百枚を要し、十五冊となった。書名を藏經音義隨函録という。）厖大な『可洪音義』は豊富な音注資料を提供してくれる。本稿は主にその中の重紐反切を対象に、『可洪音義』における重紐の実態を多面的に考察した。もちろん、重紐の通時的研究にあつて、一部の資料だけから獲得できる情報はかなり限られているが、このように一つ一つの資料について重紐の状況を明らかにし、方言的特徴、先行小学書の継承関係などに配慮しつつ、時系列上に並べて相互の差異を考察するようにすれば、重紐の通時적変遷の全貌を究明することが可能になるであろう。

参考文献

（和文文献については著者名のアイウエオ順に、中国語文献については著者名のピンイン順に並べる。）

I 類資料（テキスト類）

上田 正『切韻諸本反切総覧』，均社，1975，222p.

上田 正『慧琳反切総覧』，汲古書院，1987，254+1p.

陳彭年等，藝文印書館校訂《校正宋本廣韻》，藝文印書館澤存堂影印本，1967，144p.

丁度《集韻》，揚州使院重刻樓亭藏本，北京市中國書店影印本，1983，3冊，1634p.

²² 為一、一頁、表面。

可洪《新集藏經音義隨函錄》，《大藏經 音義部》為一～為五，弘教書院，1885，5冊，84+86+78+78+85p.

可洪《新集藏經音義隨函錄》，東京稀覯典籍蒐集會，1936，7142p.

龍宇純《韻鏡校注》，藝文印書館，1960，318p.

II 類資料（論考）

（日本語）

遠藤光暁 1990「《切韻》における稀少反切上字の分布」，『中国語学』237，pp. 1-11；後『中国音韻学論集』，白帝社，pp. 54-66，2001 所収

太田 斎 2013『韻書と等韻図』，神戸市外国語大学外国学研究所，258p.

太田 斎 2014「疑母重紐 A 類小韻試論 附論 云母との相補性」，『開篇』33，pp. 38-60

佐々木猛 1983「庚清韻贅説」，『伊地智善繼・辻本春彦両教授退官記念 中国語学・文学論集』，東方書店，pp. 392-438

高田時雄 1994「可洪随函録と行珣函音疏」，『中国語史の資料と方法』，京都大学人文学科学研究所研究報告，pp. 109-156

辻本春彦 1954「いわゆる三等重紐の問題」，『中国語学研究会会報』24，pp. 6-9

森博達 1983「中古音重紐舌齒音字の帰類」，『中国語学・文学論集：伊地智善繼・辻本春彦両教授退官記念』，東方書店，pp. 372-391

平山久雄 1966「切韻における蒸職韻と之韻の音価」，『東洋学報』49-1，pp. 42-68

平山久雄 1967「中古漢語の音韻」，牛島徳次等編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店，pp. 146-148

平山久雄 1972「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」，『東洋学報』55-2，pp. 64-94

平山久雄 1977「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」，『東洋文化研究所紀要』73，pp. 1-42

平山久雄 1991「中古漢語における重紐韻介音の音価について」，『東洋文化研究所紀要』114，pp. 1-41

（中文）

比丘明復 1988《中國佛學人名辭典》，中華書局，670+190+3p.

儲泰松 2004《可洪音义》札记，《古汉语研究》第2期，pp. 9-11

董同龢 1948《上古音韵表稿》，《中央研究院历史语言研究所集刊》第18本，pp. 1-249；原中央研究院历史语言研究所单刊甲种之二十一，1944（未见）

- 黃仁瑄, 聂宛忻 2007 唐五代佛典音義音系中的舌音聲母, 《語言研究》第 2 期, pp. 22-27
- 黃仁瑄 2010a 唐五代佛典音義音系中的唇音聲母, 《語言研究》第 4 期, pp. 97-102
- 黃仁瑄 2010b 唐五代佛典音義音系中的全濁聲母, 《語言研究》第 4 期, pp. 436-441
- 黃仁瑄 2011a 唐五代佛典音義音系中的牙音聲母, 《漢語學報》第 1 期, pp. 1-6
- 黃仁瑄 2011b 《唐五代佛典音義研究》, 中華書局, 344p.
- 黃笑山 1996 《切韻》三等韻的分類問題, 《鄭州大學學報(哲學社會科學版)》第 4 期, pp. 81-82
- 李秀芹 2006 中古重紐類型分析, 浙江大學博士論文, 223p.
- 麥耘 1998 从尤、幽韻的關係論到重紐的總體結構及其他, 《語言研究》第 2 期, pp. 124-129
- 潘悟云 2001 反切行為與反切原則, 《中國語文》第 2 期, pp. 99-111
- 許端容 1989 可洪新集藏經音義隨函錄音系研究, 中國文化大學中國文學研究所博士論文, 541p.
- 許端容 1991 可洪新集藏經音義隨函錄敦煌寫卷考, 《第二屆敦煌學國際研討會論文集》(漢學研究中心叢刊 論著類第 2 種), pp. 235-250
- 張日昇等 1973 《周法高上古音韻表》, 三民書局, 329p.
- 鄭賢章 2007 《《新集藏經音義隨函錄》研究》, 湖南師範大學出版社, pp. 9-17
- 周法高 1989 隋唐五代宋初重紐反切研究, 《中央研究院第二屆國際漢學會議論文集》, pp. 85-110
- 教育部異體字字典(台灣學術網路十一版(正式五版)), <http://dict.variants.moe.edu.tw/main.htm>

Keywords: 可洪音義 重紐 類相關 例外反切 舌齒音字

付錄一：A 類重紐字反切一覽

文韻聲母	歸字	上字	下字
幫	裨	補	吉
幫	卑	必	支
幫	裨	必	支
幫	卑	補	支
幫	裨	補	支
幫	痺	卑	至
幫	痺	必	至
幫	卑	卑	爾
幫	卑	必	爾
幫	卑	并	卑
幫	裨	蒲	利
幫	痺	卑	弭
幫	卑	必	脾
幫	卑	必	脾
幫	卑	必	啤
並	脾	蒲	支
並	啤	悶	支
並	脾	步	支
並	脾	卑	至
並	脾	蒲	卑
並	裨	蒲	卑
並	脾	步	卑
並	啤	步	卑
並	脾	步	米
並	脾	步	未
並	啤	鼻	兮
明	彌	莫	卑
見	規	吉	隨
見	規	居	隨

[illegible]

脂韻	歸字	上字	下字
聲母	歸字	上字	下字
滂	紕	匹	夷
滂	紕	匹	比
並	比	步	夷
並	毳	步	夷
並	毳	蒲	脂
並	毳	蒲	脂
並	比	步	脂
並	毳	步	脂
見	飢	居	夷
見	肌	居	夷
羣	祁	巨	伊
羣	葵	巨	惟
羣	葵	巨	維
羣	葵	巨	追
羣	祁	巨	尸
影	伊	一	耆
影	伊	於	耆
旨韻	歸字	上字	下字
聲母	歸字	上字	下字
幫	匕	卑	履
幫	毗	卑	履
幫	毗	卑	履
見	机	居	旨
見	机	居	履
羣	跽	其	履
羣	跽	其	几
羣	跽	求	癸
羣	揆	求	癸
羣	揆	其	癸
至韻	歸字	上字	下字
聲母	歸字	上字	下字

[illegible]

並	牝	蒲	忍
並	牝	秘	忍
並	牝	步	忍
並	牝	毗	忍
並	牝	毗	忍
明	牝	毗	民
明	牝	彌	引
明	牝	彌	引
明	牝	莫	忍
明	牝	民	忍
明	牝	民	忍
明	牝	澠	兗
見	牝	緊	引
見	牝	緊	引
見	牝	緊	忍
見	牝	緊	忍
震韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	擯	卑	進
幫	殯	卑	進
幫	鬢	卑	進
幫	殯	賓	進
幫	殯	卑	刃
質韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	必	卑	一
幫	畢	卑	吉
滂	匹	普	一
滂	匹	普	吉
滂	匹	普	必
並	比	步	一
並	比	毗	吉
並	比	蒲	必

並	泌	頻	必
並	苾	毗	必
並	邲	毗	必
並	邲	毗	吉
明	比	毗	律
見	楹	莫	必
溪	鞋	去	吉
溪	蛄	丘	吉
諄韻			
聲母	歸字	上字	下字
見	均	古	勻
見	均	吉	旬
見	均	居	旬
見	均	古	巡
見	均	吉	旬
見	均	居	旬
見	均	居	旬
術韻			
聲母	歸字	上字	下字
見	橘	居	律
仙韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	鞭	卑	連
幫	鞭	布	連
滂	翩	匹	連
明	綿	覓	延
明	綿	彌	田
明	綿	莫	連
明	綿	彌	連
見	甄	居	延
見	甄	古	賢
見	甄	居	賢

影	惛	於	緣
獮韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	編	匹	錦
幫	編	邊	緬
幫	編	卑	面
幫	編	匹	連
明	緬	卑	充
明	緬	莫	充
明	緬	彌	充
溪	遣	去	演
線韻			
聲母	歸字	上字	下字
滂	騙	匹	面
溪	譴	去	戰
薛韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	慙	毗	祭
幫	慙	毗	世
幫	慙	并	列
幫	慙	并	列
幫	慙	并	袂
明	滅	莫	列
宵韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	標	補	招
幫	標	毗	招
幫	標	必	搖
幫	麤	補	遙

幫	飄	卑	遙
滂	標	必	招
滂	漂	匹	遙
滂	漂	必	遙
並	瓢	毗	藥
並	瓢	毗	遙
溪	蹻	去	僑
羣	翹	區	消
羣	翹	巨	遙
影	要	一	消
影	要	於	消
影	要	於	遙
小韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	表	彼	矯
滂	縹	匹	小
滂	縹	匹	沼
明	森	彌	小
明	眇	彌	沼
笑韻			
聲母	歸字	上字	下字
滂	瞞	匹	昭
並	驃	婢	妙
並	驃	毗	妙
侵韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	愔	伊	心
影	愔	於	心

影	愔	於	林
緝韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	揖	伊	入
影	揖	一	入
影	揖	於	入
鹽韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	歷	於	捻
琰韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	厭	伊	琰
影	厭	於	琰
影	厭	於	琰
艷韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	厭	於	焰
葉韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	厭	於	吹
影	厭	於	葉
清韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	屏	步	冥
幫	屏	蒲	經
羣	羣	巨	營
羣	頸	巨	營
羣	瓊	於	盈
影	瓊	烏	盈
影	襲		

影	縈	於	營
靜韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	屏	卑	領
幫	屏	并	郢
幫	屏	卑	領
見	頸	吉	井
見	頸	居	井
見	頸	吉	聖
見	頸	居	郢
見	頸	一	井
影	瘦	於	郢
影	瘦	於	井
影	瘦	於	盈
勁韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	屏	蒲	性
幫	屏	蒲	政
幫	併	卑	政
幫	併	瓶	政
幫	併	并	政
幫	併	毗	政
幫	併	卑	正
幫	併	卑	正
幫	并	卑	聖
滂	聘	匹	政
滂	聘	匹	正
並	倂	毗	井
並	倂	莫	性
明	詔	彌	政
明	詔	居	政
見	勁		

見	勁	九	政
見	勁	居	聖
曉	復	休	政
昔韻			
聲母	歸字	上字	下字
幫	辟	補	益
幫	辟	補	歷
並	蹕	蒲	益
並	蹕	卑	益
並	蹕	布	益
並	闢	房	益
並	蹕	房	益
並	闢	旁	益
並	擗	旁	益
並	闢	毗	益
並	擗	毗	益
並	裨	毗	益
並	蹕	毗	益
見	齔	居	碧
幽韻			
聲母	歸字	上字	下字
見	樛	居	幽
見	樛	堅	幽
羣	虯	祇	幽
羣	璆	巨	幽
羣	虯	巨	幽
黝韻			
聲母	歸字	上字	下字
見	糾	居	酉
見	糾	吉	黝
見	糾	居	黝
影	黝	一	糾

影	黝	於	糾
幼韻			
聲母	歸字	上字	下字
影	幼	伊	謬

付錄二：B 類重紐反切一覽

支韻			
韻母	歸字	上字	下字
幫	罷	彼	皮
幫	陂	彼	皮
幫	陂	被	皮
幫	碑	碧	眉
滂	披	彼	依
滂	披	普	義
滂	披	普	悲
滂	鉞	普	皮
並	疲	蒲	碑
明	糜	美	為
明	糜	美	垂
明	糜	美	彼
明	糜	眉	搗
明	媯	居	菱
見	羈	居	奇
見	羈	居	宜
見	綺	丘	倚
見	虧	丘	為
溪	崎	丘	宜
溪	敲	巨	宜
溪	琦	渠	宜
羣	魑	於	為
羣	委	於	為
影	菱	於	宜
影	透	丘	垂
影	欹	於	搗
影	痿	於	
影	委		
影	透		

曉	犧	許	宜
紙韻			
韻母	歸字	上字	下字
明	靡	眉	彼
明	靡	文	彼
明	靡	無	彼
見	歧	居	偽
見	詭	歸	委
見	倚	丘	倚
見	畸	居	綺
見	詭	居	委
見	歧	巨	委
羣	跪	具	委
羣	跪	其	委
羣	伎	其	綺
羣	伎	其	綺
羣	伎	奇	倚
羣	伎	巨	倚
疑	蟻	魚	綺
疑	蟻	宜	綺
疑	蟻	牛	委
疑	顧	魚	倚
疑	蟻	居	豈
疑	蟻	牛	倚
影	倚	衣	綺
影	倚	於	奇
影	倚	於	宜
影	倚	於	蟻
影	倚	於	綺

寘韻
韻母

幫
幫
幫
幫
滂
並
並
並
見
見
見
溪
羣
羣
羣
疑
疑
疑
影

脂韻
韻母

滂
滂
滂
並
並
明
明
見
溪

歸字

陂
陂
陂
陂
賁
賁
賁
賁
賜
賜
賜
敝
騎
騎
芝
義
偽
誼
餒

歸字

丕
丕
平
邳
邳
麋
麋
龜
歸

上字

彼
彼
普
普
披
兵
兵
彼
歸
居
居
居
奇
巨
其
許
魚
宜
於

上字

普
普
普
苻
步
美
美
居
丘

下字

義
義
義
義
皮
義
媚
義
義
為
義
位
偽
寄
寄
寄
宜
位
寄
偽

下字

悲
悲
悲
悲
悲
為
悲
追
軌

旨韻
韻母

幫
幫
滂
並
並
並
見
並
並
見
見

至韻
韻母

幫
幫
幫
幫
滂
並
並
並
明
明
見
見
見
見
溪
羣
羣
羣
疑

歸字

鄙
鄙
鄙
否
否
否
軌
圯
圯
晷
晷

歸字

轡
轡
轡
轡
秘
鼻
備
備
備
備
魅
媚
覬
驥
冀
器
匱
簠
暨
劓

上字

悲
兵
披
悲
皮
皮
居
皮
皮
居
居

上字

彼
悲
兵
兵
匹
皮
皮
平
平
眉
眉
居
居
九
丘
巨
巨
其
魚

下字

美
美
美
美
美
彼
美
洧
美
鄙
水
美

下字

媚
媚
媚
媚
備
秘
秘
秘
秘
秘
利
利
利
利
位
位
冀
利

疑	剿	疑	器
疑	剿	魚	器
疑	剿	魚	至
影	懿	於	翼
影	懿	於	冀
影	懿	乙	冀
祭韻			
韻母	歸字	上字	下字
見	獬	居	例
見	獬	居	例
見	獬	九	例
溪	憩	丘	例
真韻			
韻母	歸字	上字	下字
幫	斌	彼	巾
幫	彬	彼	巾
幫	邠	彼	巾
幫	邠	彼	巾
幫	邠	普	巾
幫	邠	甫	巾
明	岷	美	巾
明	珉	美	巾
明	閏	美	巾
見	巾	居	銀
疑	囀	牛	巾
疑	銀	魚	巾
疑	囀	魚	巾
影	贊	於	倫
影	頤	於	倫
軫韻			
韻母	歸字	上字	下字
明	敏	眉	殞

明	愍	眉	殞
明	愍	眉	殞
明	愍	眉	殞
羣	菌	巨	殞
羣	菌	其	殞
羣	菌	於	殞
疑	斷	宜	盈
震韻			引
韻母	歸字	上字	下字
羣	僅	巨	恪
羣	僅	巨	恪
羣	僅	其	恪
羣	僅	其	恪
質韻			
韻母	歸字	上字	下字
幫	筆	彼	密
並	弼	平	密
並	弼	皮	密
明	弼	皮	密
見	密	眉	筆
見	吃	居	筆
見	訖	魚	乞
羣	吃	居	乙
羣	估	耆	乙
羣	姑	巨	乙
羣	姑	近	乙
仙韻			
韻母	歸字	上字	下字
溪	愆	丘	乾
溪	褰	去	乾
溪	騫	許	言
溪	愆	丘	乾

[illegible]

小韻

韻母	歸字	上字	下字
見	矯	居	小
見	矯	居	少
見	矯	居	少
影	夭	於	少
影	夭	於	少
影	夭	於	少
影	夭	於	小

笑韻

韻母	歸字	上字	下字
明	庙	美	照
羣	嶠	巨	照
羣	嶠	巨	要

侵韻

韻母	歸字	上字	下字
見	衿	居	吟
見	襟	居	吟
見	襟	告	吟
見	禁	居	蔭
見	衿	丘	林
溪	衿	丘	金
溪	衿	巨	今
羣	擒	巨	今
羣	擒	巨	今
羣	擒	巨	今
疑	吟	宜	今
疑	吟	魚	今
影	陰	於	禁
影	瘡	於	金
影	陰	於	今
影	瘡	於	今

寢韻

韻母	歸字	上字	下字
幫	稟	彼	錦
幫	稟	匹	錦
幫	稟	兵	錦
羣	噤	巨	飲
羣	噤	巨	飲
羣	噤	巨	錦

沁韻

韻母	歸字	上字	下字
羣	噤	其	禁
影	飲	於	禁
影	蔭	於	禁
影	暗	於	禁
影	瘡	於	禁
影	瘡	杉	禁

緝韻

韻母	歸字	上字	下字
見	級	居	及
見	汲	居	水
見	級	居	立
見	級	居	立
影	悒	於	立
影	悒	於	及
影	悒	於	及
曉	吸	許	立
曉	吸	許	及
曉	吸	許	立
曉	吸	許	及
曉	吸	許	急

鹽韻

韻母	歸字	上字	下字
羣	鉗	其	炎
羣	黔	其	炎

羣羣羣羣羣影影影	鈐鈐鈐鈐鈐淹闔闔	其巨其其於於於	炎廉廉廉廉廉檢	並並明見見見見羣羣疑影	評平明荊驚驚荊鯨勅擎迎瑛	皮皮莫居居京居巨巨魚於	兵兵兵迎影影英京京京京
琰韻 韻母 幫幫幫見見見見見羣影影影影	歸字 貶貶貶瞋瞋瞋檢儉掩奄揜揜	上字 悲兵兵魚居居其於於於於	下字 檢檢掩焰儼掩奄奄檢檢檢檢	梗韻 韻母 幫幫明明見見見見影	歸字 炳秉皿皿警儼警警影	上字 彼兵眉明居居京居於	下字 永永永丙影影影景景
艷韻 韻母 幫疑疑疑疑	歸字 迄驗驗驗	上字 方居魚魚	下字 焰奄焰焰	陌韻 韻母 溪溪溪溪羣羣羣羣	歸字 隙隙隙隙劇劇展劇	上字 去丘苦丘奇巨巨其	下字 逆逆逆戟逆逆逆逆
庚韻 韻母 幫	歸字 兵	上字 彼	下字 平				

疑	逆	魚	戟
幽韻			
韻母	歸字	上字	下字
幫	彪	彼	休
幫	彪	彼	幽
幫	羈	補	幽
幼韻			
韻母	歸字	上字	下字
明	繆	眉	幼
明	繆	美	幼

蒸韻			
韻母	歸字	上字	下字
幫	冰	彼	勝
幫	冰冰	彼	陵
並	馮	皮	證
並	憑	平	陵
並	馮	皮	陵
並	馮	皮	冰
並	凭	皮	證
職韻			
韻母	歸字	上字	下字
幫	逼	彼	色
幫	逼	彼	力
曉	闕	況	逼